

【ケニア共和国・ロキチョキオでの国際医療救援活動】

イラクでの戦争以降、新聞等でも赤十字国際委員会(ICRC)という文字を目にする機会が増えましたが、ICRCとは世界中の赤十字活動の本体で、紛争や災害発生時に、医療救援、物資、人材派遣や復興支援、難民支援などあらゆる人道支援を行っています。

この度このICRCの要請を受け、当院の御理解を得て、ケニアのロピディン戦傷外科病院に派遣されました。諸般の事情により予定よりも短いミッションでしたが、全く違う環境での医療には学ぶことも多く、現地での貴重な経験をご報告したいと思います。

8月6日成田を発ち、ジュネーヴのICRC本部でブリーフィングを受けた後、アムステルダム経由でナイロビ着、そこから20人乗りくらいの小さなプロペラ機で現地入りしました。

病院はスーダンとの国境沿いのロキチョキオという所にあり、約17年前にスーダンの内戦犠牲者救済のためにICRCが設営した戦傷外科専門の病院です。ロピディンは昨年当院の喜田さんが派遣されたジュバの病院が政府軍の犠牲者を收容するのに対し反政府軍側の犠牲者を收容するために設営された病院です。

病院はサバンナの中にあり、情勢によってベッド数は増減するのですが、私のいた時は250床前後でした。病棟は大きなテントやプレハブで、その中にベッドがずらっと並んでいます。ドアはなく、男女混合ですし、ICUでも患者さんにハエがたかり放題です。病院スタッフは、ICRCから私を含めて外科医3名、麻酔科医2名、看護師12~3名の他に病院運営責任者などの事務系がやはり10数名ICRCから派遣され、国籍は20以上に上ります。現地スタッフは看護師数十名以外に給食や清掃など全部で200名程を雇用しているとのことでした。



扱う疾患の6~7割は銃創で、他に毒蛇やハイエナなどの咬傷、また地元住民の緊急外科疾患(虫垂炎、ヘルニア、帝王切開)などがあります。従って私の専門である呼吸器外科的な疾患はほとんどありません。スーダンからの交通手段はないため、メディバックと呼ばれるチームが3~4機の飛行機を毎日飛ばし、20ヶ所ほどある南スーダンの拠点を回ります。ただし病院は設備も資源も限られているため、助けられない患者さんは運びません。ライニングナースと呼ばれる専門ナースがいて、パイロットと共に飛行機に乗り、この肉体的にも精神的にも厳しい仕事をしています。

病院内の公用語は英語ですが、スーダン人は部族の言葉しか話しませんので、英語と部族の言語の間の通訳がおり、その通訳を介して患者さんと意思の疎通をはかることになります。

毎日8時からのICU回診が終わると手術室に直行し、一日十数件の手術を指導外科医1名を含む3人の外科医で行います。手術台が3台あり、3人がそれぞれ現地の看護師と二人で手術することになります。麻酔は2名の麻酔科医に現地スタッフが2~3名おり、この現地スタッフは医師免許を持たないものの、ICRCから派遣された麻酔医に指導してもらって大体のことはできるようになっています。

現地の看護師は長く働いている人が多く、色々なことを良く知っており、彼らに教えてもらいながらやることも多々ありました。他の外科医に助手をもらって四肢の切断や虫垂炎、帝王切開など、普段絶対しない手術も多く行いましたが、初めての手術が多い上に電気メスもなく、切れない鉗など道具も違い、慣れてきた頃にミッションが終わってしまった感じでした。

夜はもう一人の外科医と一日交代で翌朝までオンコールとなり、無線をつけっ放しにして、緊急連絡に備えます。



今回の派遣では、設備のない場所で、来た患者さんを全て診るという、ある意味医療の原点のような環境を経験しましたが、それでもなんとかこの人達に、大阪日赤で受けるのと同じ水準の手術をしてあげたいと思いながら治療していました。現在の日本の専門医制度とは対極にあるような診療がそこにはあり、自分の経験不足から、今回の派遣で戦力として働いたとは言えないのが本音です。この経験を、ただ珍しい所へ行ってきましたというだけに終わらせることのないように活かしたいと思っております。